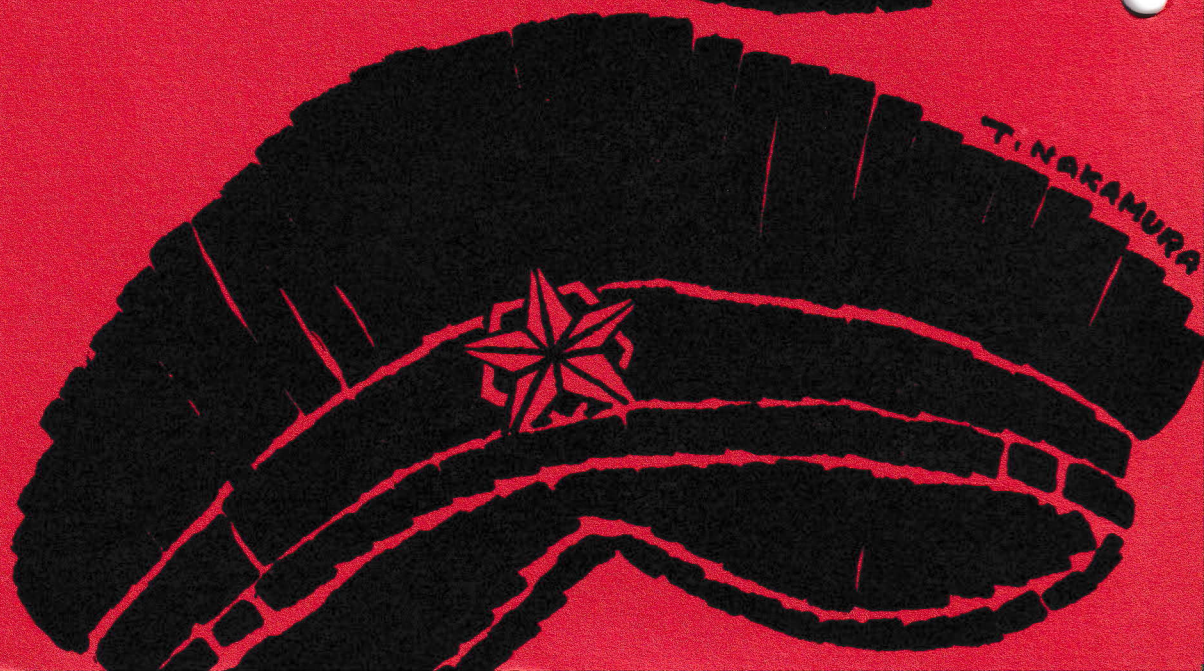
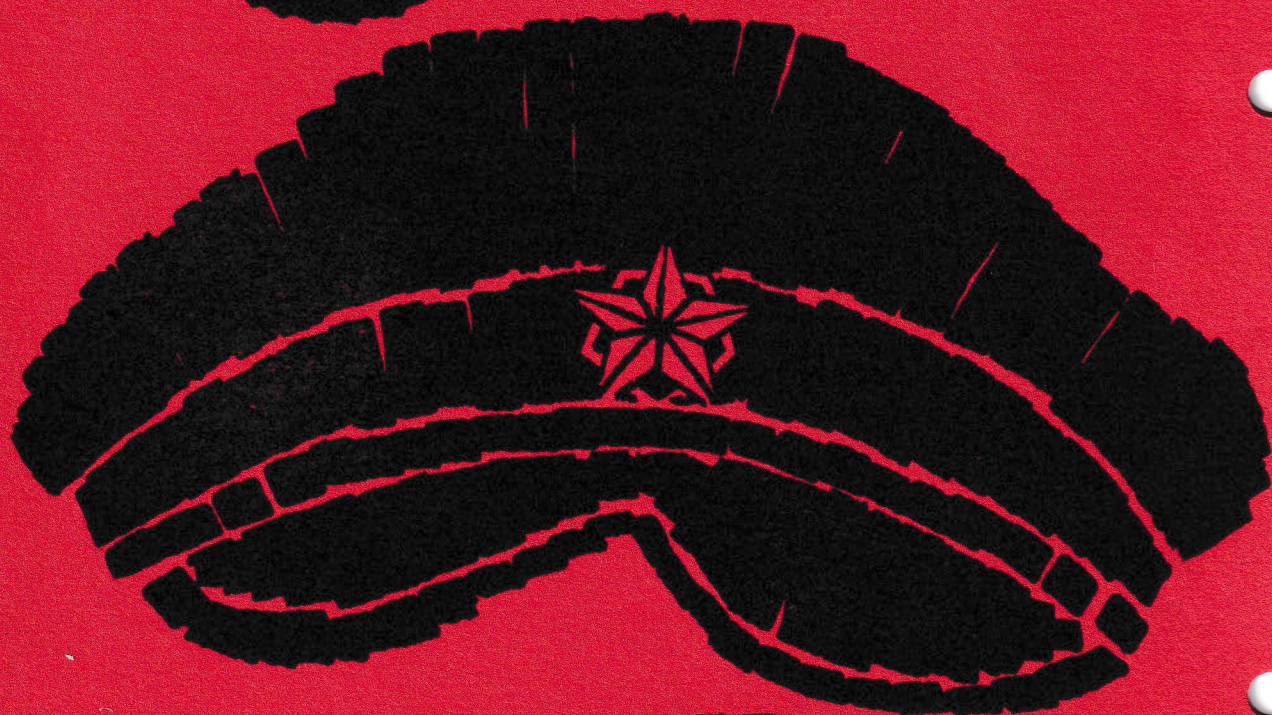


静 中・静 高
関 東 同 窓 会

会報6



巻頭のことば

会長 宮澤次郎

昭和五十三年も残り少くなりました。同窓の皆様如何お過ごしでしょうか。昨今のきびしい環境の中にも皆様それぞれ活躍の事と存じます。

私共の同窓会も順調に活動して参りました。特に今年は母校創立百周年に当り各種記念事業が行われましたが、皆様には資金拠出、式典参加等の御協力を頂き。お蔭様で極めて盛大且有意義に実行できました。ご同慶に存じますと共に厚くお礼申し上げる次第でございます。

さて、百年の節目を祝うという事は、一面新しい百年の歴史に一步を踏み出す事でもありません。私共は古き良き伝統の継承者であると共に新しき時代の建設者でなければならぬと存じます。私共の関東同窓会がその意味で機能致します為に、新しい同窓生諸君の積極的な活躍と、若いエネルギーによる運営を切に希望する次第でございます。

五十三年度総会開かる

於築地すえひろ大宴会場



挨拶する宮澤会長

六月二日関東同窓会総会が、来賓に小山同窓会副会長、吉川校長 渥美教頭、鈴木敏夫先生並びに恩師直井豊先生を迎え、築地すえひろ大宴会場で賑やかに行われた。昨年同様、郷土色豊かな同窓会で、五百名に近い出席者という盛会であった。

会は見里得知郎氏(53期)の司会によって開会、宮沢会長、小山同窓会副会長、母校校長吉川先生の挨拶に引き続き議事に入り、52年度事業報告、同会計報告、同監査報告、並びに53年度事業計画、同予算について幹事会提案を承認可決した。

又、役員改選も行われ、幹事会代表成岡英彦氏(67期)より役員候補の推薦があり、全員一致で宮沢会長以下各役員の重任を決定した。

続いて本年十月に行われる母校百年記念事業計画とその進捗状況が、小山同窓会副会長より報告された。

引続いて懇親会に入り、中積千思氏のハモンドオルガンの演奏をバックに井出多夫氏(42期)の音頭で校歌を合唱し、出席者中最先輩(21期)の土屋正三氏の発声で乾杯を行った。

恩師直井豊先生の挨拶、各期代

表の挨拶等々、会場の雰囲気は最高潮になった。

会場のテーブルには、案内状どおり、煮えきりおでん、黒ハンペン、玉ネギのフライ等静岡の懐しい名物が並び、皆往時の悪童にかえってそれらにかぶりつきながら先輩、後輩交歓風景があらわらにみられた。

予定時間はたちまちのうちに過ぎ、畔柳安雄氏(35期)の音頭で高らかに母校の榮譽と会員諸氏の健闘を祈って万歳を三唱して散会した。又、受付には石部屋の安倍川餅、田丸屋の山葵漬、塩津の小鰻頭、鯛めし、追分羊かん、塩辛等の名産コーナーが開設され、全品会費までに売り切れるという大繁昌ぶりであった。

今回も会場借用については42期岩波信平氏の、名産品コーナーでは67期の在京の成岡英彦、堀原由三、朝比奈正三の各氏と静岡より桜井昌一郎、織田三喜彦、永井滋惟、光木徹の各氏の献身的サービスがあったことと、奥野副会長(53期)の情熱的バックアップに對し紙上を借用して感謝します。いずれにしても、楽しく愉快に過した一夜であり来年の再会を期して、本年の関東同窓会総会を終了した。(68期雨宮明生)

全市あげての祝典

—— 静中・静高百年祭 ——

十月七日、好天に恵まれ懸案の百年祭が盛大に行われた。事は学校同窓会に止

まらず、静岡を挙げてのお祭りとなり、この前後はホテルと料亭は満席、呉服

町七間町辺りは写真の如く横断幕を掲げる状態であった。式典に於ける同窓会

長及び校長の式辞、参列された恩師の言葉各期の百年祭便りを御紹介しよう。

式 辞

静岡県立静岡高等学校
創立百周年記念事業実行委員会

会 長 鈴 木 与 平

本日ここに多数の来賓、恩師のご臨席を賜わり、同窓生、在校生一堂に会して、静岡県立静岡高等学校創立百周年記念の式典を挙行することができましたことは、まことに感激に堪えません。

明治政府の日本近代化政策は先ず教育から始められ、「邑に不学の戸なく、家に不学の徒なからしめん」との悲願のもとに、明治五年には学制が發布され、まず初等教育が実施され、各町村に小学校が、続いて中等普通教育機関としての中学校が各地に設置を見まし

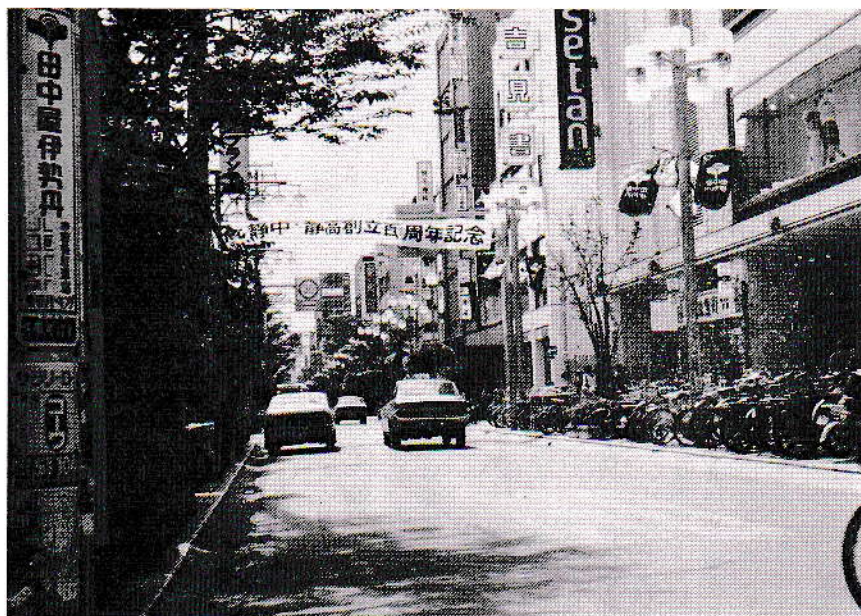
たが、こうした流れのなかで、明治十一年八月、本校の前身である静岡師範学校中学校が開校され、翌十二年に県立静岡中学校として独立いたしました。

爾來静岡中学校からは幾多の逸材が輩出、その社会的活動は高く評価され、長い伝統を誇ってまいりましたが、たまたま今次大戦中及び戦後を通じ、校舎の移転、焼失等に遭い、また学制の改革に伴って、静岡第一高等学校、静岡城内高等学校、そして現在の静岡高等学校と再三に渉る称号の変更が

あり、流転苦難の途を辿りながら現在までに二万余名の卒業生を社会に送り、よくその栄光を保って今日を迎えることができました。

静岡県立静岡高等学校同窓会はここに期するところがあり、創立百周年記念の事業を計画、約五年ほど前から創立百年史の編集に着手するとともに、同窓会の組織強化と募金の準備にかかり、同時に学校側、P・T・A、印高会とも緊密な連絡のもとに、記念事業の具体的細目について協議を進め、創立百周年記念事業実行委員会に切替、事業の推進をしてまいりました。

記念事業としては、本日の式典に続くパーティ、印高祭、資料展と、これに先だって母校の大先輩であり、型絵染無形文化財として



百年祭祝賀一色に塗りつぶされた市内目抜通り

人間国宝である片沢鉦介先輩の作品小品展、N・H・K交響楽団の公演、チャリティバザーの開催があり、また野球部の甲子園における善戦はこの百年祭に花を添えま

した。いっぽう後まで心残る事業として同窓会館の増築、運動部室

の改築、記念碑の造成、植樹等もいたしました。

しかし実行委員会としての最大の記念の仕事は百年史の編集であり、編集委員の夜を日につぐ献身的な作業によって当初考えていたものよりはるかに充実した膨大な

集大成となり、一静高史としてではなく、本県高等学校教育史として位置づけられるものが上梓されたと考えられます。

なお本事業遂行に必要な資金はお蔭をもちまして、同窓会各期の方がたのご協力により予定額をはるかに超過いたしましたことは感謝に堪えません。この席から改めて御礼を申し上げます。

このような多彩な百年の祭ができましたことも、ひとえに百年に渉る歴史と、かつて本校に在職された恩師並びに現職の諸先生がたのご薫陶と、県教育委員会、その他一般関係の方がたの、本校に寄

せられたご支援、ご協力の賜と深く感謝いたします。

今ここに百年という節目に立つて、わが国内外の情勢を展観するときに、今日ほどその志を大いに用いなければならぬ時代はないと考えます。この式典を契機として、在校生は希望多き新しい世代に向って、力強く第一歩を踏み出され、静高が今後益々伝統の精神である富士の白雪になぞらえた清き心と、からくれないの旗印に示された至誠とを永く保持し、社会に重きをなす学校としての榮譽をますます発揚されますことを期待して式辞といたします。

ごあいさつ

静岡県立静岡高等学校
校長 吉川 晴 夫

本日、ここに、静岡県立静岡高等学校創立百周年の記念式典にあたり、県御当局を始め、かくも多数の来賓ならびに同窓会、PTAの皆様方の御臨席を賜わり、満堂にひとしおの光彩を添えていただきましたことは、本校の無上の光榮とするところであり、教職員生徒一同衷心より感謝申し上げる次第でございます。

本校は、明治十一年、静岡師範学校内に中学課として創設されて以来、学制の改革等に伴って幾たびか校名を変え、その所在地も追手町から西草深町、長谷町、さらに戦後は高松、小鹿、城内、そして、再び、長谷町と、その所を移してまいりましたが、これらの変遷の過程には、まさに大小さまざまな歴史の綫が織り成されており

ます。

申すまでもなく、この間に幾多の俊秀逸材を世に送り、二万人になんなんとする卒業生の方々が、社会の各方面に活躍され、そこに印された足跡貢献は枚挙に暇なくまことに大きなものがあります。

母校は心のふるさとであると申しますが、今ここに、多くの卒業生の方々は、あの、静岡中学校代のコノ字なりの古い薨の木造校舎や、そこにまつわるすべての事象がありありと眼底に焼きついておられることと思います。煉瓦色の正門や、前庭、中庭の桜の植え込み、その中庭に突き出た校長室旧講堂、寄宿舎の建物、その食堂を改造したという工作室、武道場記念館と兵器庫、波型に擦り減った階段のきしみ、油に染みた床板やその香り、果ては、始業、終業を告げた古い鐘の響きなど、一つとして、思い出のよすがとならないものはありません。しかし、そこにある思いは、単なる思い出や、郷愁ではなく、その時代その時代を、この学び舎に、精一杯に生きた若き生命を確認しようとする意志であろうと思います。戦時色の強くなった昭和十年代の後半は、すべてに厳重な統制下の学校生活であり、時には、学び舎を離れ、

ペンを捨てて生活の余儀なくされました。しかし、このような苦悩の中にも、若き血潮を燃やし続けたいひたむきな生き方があったことも事実であります。やがて母校は戦火にその姿を消し、仮校舎を転々とする苦難の道が続きましたがこれはまさに、この時代を生き抜いた人々のみが知るきびしい道程であったと思います。

静岡中学校、静岡第一高等学校城内高等学校という校名変更の過程には、この激しく変動した時の流れの中に、新しい歴史の胎動が如実に感じられるのであります。

この間に、学制の改革に伴って通信教育部が設けられ、さらに、定時制課程が設置されて、初めて勤労学生としての静岡高校生が誕生したのは、共学による女子生徒の出現と共に、特筆すべきことであります。これらの歴史の節々には、職員にせよ、生徒にせよその場、その場を無我無中に生きた人々の姿が、まざまざと浮き彫りにされています。

昭和二十七年から二十八年にかけて待望の長谷の地に新校舎が竣工し、校名も静岡高等学校と改められるに及んで名実共に安定した教育環境の中での静岡の歴史づくりが始まったのであります。爾來

二十五年の星霜を経たのであります。この間は、めまぐるしい社会激動の中で新制高校としての静岡が古い伝統の上に、次々と新しい歴史を加えた時期であります。

もちろん、ここには、数々の曲折があり、苦しみがありました。たとえば、高校生としての自治や、主体性の問題、勉学生活と自主的な諸活動の問題、静高生の間接や連帯感の分析等々、その時々諸々の記録は、今もなお、生々しい、時代の苦悩を訴えています。

しかし、これらが抱えている問題は、現在も、さらに、今後も、その様相を変えることこそあれ、常に新たな創造を求めて、永久に追求し続けなければならぬ課題であります。静岡中学以来、本校には「高きを仰ぐ」、即ち「印高」ということばがありますが、このことばは、高き理想の追求と実践を意味しながら、常により新しい生命と意義とを持ち続けて、本校の教育実践の基本となり校訓となつて現在に生き続けております。

このことは、その時々を背負った人々が、いたずらに伝統の形骸にとらわれることなく、常に新たな歴史の創造に努力してきたあかしであり、伝統が時代と共に生きてきたことの確証であると信じま

す。

魂のよすがである母校には常に若々しい生命が、限らない可能性を継承して生き続けております。

生徒たちは、先輩の残した高き価値を追求し確かめながら、その中に自分を発見し、新たな創造発展への意欲を燃やしています。本年は、勉学に、運動に逞しい飛躍を見せ、実績を挙げました。そしてこの夏は、甲子園の大スタンドで白髪の大先輩も、若い卒業生も、そして在校生も、すべてが一つの感激に結ばれて、高らかに「岳南健児……」を歌いました。選手たちの気魄に満ちたプレーの中からまさしく、世代を越えて共感できる感動を汲み取り、不易の真実をお互いのからだで確かめ合うことができたのであります。

恩師の言葉

小澤 三郎

この度静中・静岡創立百周年記念祝典にお招きに預り、久しぶりに錦地を訪れる機会を得た。この日の駿府会館に集った人の波は、なんと静岡市民の大部分は、静中・静岡の卒業生でなかったかと思われるほどの賑わいであった。式

私達、八十名の現職教職員と、

一千三百余名の在校生一同は、この銘記すべき年を迎え、ひとしおの感激の中にも、重い責任と使命とを、身を以て感じております。

この長い歴史と伝統の基盤に、郷土静岡の山河があり、町があり人があるという尊厳な事実を忘れることなく本校に寄せていただく皆様方のあたにかいお心に対するひたすらなる感謝の中に、百年の歴史の持つ意義に深く思いをいたし、相携えて、百一年目への第一歩を、力強くしるす覚悟であります。今後共、各般に亘って皆様方のいっそうの御支援御鞭撻をお願い申し上げます。

以上所懐の一端を述べあいさつといたします。

典は時間通り而も厳粛裡に、スムーズに進行されて流石はと感激するばかりであった。

山本知事はじめ来賓名位の祝詞或は挨拶に百周年の重みと言われたように、静中・静岡の建学精神を体して指導された先生・先輩たちが優れた名門校に築き上げたわけで、自分らは偶々今日の佳き日

に運よく出会い、この光栄に浴して、しみじみと身の幸福を味わった。殊に校歌の岳南健児一千の理想は高し富士の山云々二唱には感激の涙が出てしやうがなかった。

自分は昭和三年から同十年まで短い期間お世話様になった。従って約半世紀昔で、賤機山の麓の校舎の跡は当時を偲ぶものとしては唯一の印高の碑だけで、懐しさの余り碑の前にしばしば拝むほどではないが軽く会釈してたたずんだ。案内役の司馬さんが、あそこが寄宿舎の跡、ここが体育館の跡と説明してくれたが、一入今昔の感で一杯だった。当時の校長は伊藤保三郎先生で厳格で而も慈父の如き人格者だった。二十五、六才の若僧の自分らにはこわい存在でした。

とまれ静中精神に燃える生徒たちと共に充実した七ヶ年間でいろいろ楽しいこと、懐しい思い出は尽きないが、その一つは、大沢和夫先生と共に寄宿舎の舎監をしていた時、舎生が小沢の名をかたり、「さくらソバ」代のつづが小生の俸給のなんと二倍「二三〇円也」請求されて言いわけしているところに、この厳格の校長が校長室より折り悪しく出てきた時である。

小生の周章は想像以上であった。その二つは、小生が舎監の当番

月に限って支出が多いので、舎監長の原平十郎先生におこごとを頂いた。それは舎生の一、二の者が松坂屋・田中屋の包装紙を丁寧に保存して、何々をこの通り買って来たから小遣金をくれと、その包装紙を廻廻して請求したからであった。(実は中味は古シヤツ古サルマタであることがあとで分った。これらの舎生は皆立派な紳士として活躍している)今は懐しい思い出として忘れ得ない。唯々ほんとに、素晴らしい名門校に厄介になったものだ、この光栄を感じ、改めて感謝している次第である。

大澤 和 夫

私は昭和三年四月より十二年四月まで静岡中学校で歴史地理の講義した旧職員であります。月見里君より話がありましたので一文を草します。

十月七日、前の晩一緒に泊った西田重雄・古曳保正・三上正男・小沢三郎・宮下清計・松村博司・近藤英雄・位野木秀一等昭十会という旧職員の会員諸君と駿府会館へ到着したのが九時半頃だった。会館の前は人々の群で皆うれしそうだった。そこで家永敏三君と会った。実に四十年ぶり。家永君は

静中史によく話題の載る教官でニクネームはブーカン。綽名は多くは生徒がわれわれ教官につけるのだが、是だけはちがう。ブール監督だったのでブーカンと尊名を奉ったのが今は亡き林新之助君だった、直井君とも会い、広田廉夫君とも握手をかわした。本告先生の元氣な御顔に接したのは会館に入ってからであった。

静中静岡創立百周年記念式典は厳粛で流石名門校だと思った。久しぶりに唱和した校歌も、私の奉職した頃のと全く同じ「岳南健児一千の」であった。女子学生も入学しているのに、今もって健児である。これを感じつつ私は伝統の重みをひしひしと感じた。流石静中。

慰霊祭の清楚な飾りつけもよかった。鈴木同窓会長の追悼のことばを聞きつつ私は御指導いただいた伊藤保三郎・高林倬二の両校長のこと、土佐光一・山下四郎・中村藤平はじめ多くの当時の先生方の面輪を思い浮べた。当時少壮客気の私は先輩の先生方に色々御迷惑をおかけしたものであって、申しわけないと思っている。

記念講演の村松喬君は私が一年B組を担当していた時の級長であった。お会いしたいと思っていた

がその機会が無くて残念だった。会ったら私の教育はまずかったと評論家の村松君からこつぽどくやられたかも知れなかったが。

会場で時折当時の生徒諸君が自己紹介してくれた。中には全く思い出せない方もないでも無かったが、見ているうちに黒ボタンの静中生の顔が浮んで来て、なつかしく強く握手をかわした。若い独身の頃の私は、漱石の坊っちゃん的な所があり、生徒諸君を叱ったり、時にはなぐったこともあったが、そのうらみは一つも聞こえなかった。皆紳士となった諸君だから口に出されなかったのである。

時間があつたので静岡へ行き百年史資料展をみた。戦災で焼失する以前の校舎があり、天皇陛下行幸の折の写真も出ていて、緊張したあの日を思い出した。写真パネルの中に郷土研究会の一同が写っているのもあって、若い私たちがむしやらに生徒をひっぱり歩いた頃がなつかしくなった。郷土研究会は沼館愛三先生と私とが中心となり昭和八年の二月に発足したもので、生徒では望月光春君と中村三郎君(戦死)が特に熱心であった。その時の機関誌「郷のかをり」を年に六回出したこともあり、良き

生徒諸君であつたと今でもなつかしく思う。最近研究会発足の時の規約と会員名簿が本棚の隅より出て来た。貴重な文献だと思つて大切に保存してある。資料展の室内で月見里君に会つたがすぐに判つた。四十年ぶりであつたが、もつともお便りは前よりいただいてはいた。同窓会の関東支部の幹事として。

駿府会館にもどつて祝賀パーティーに出席した。卒業して早稲田や慶応に入り応援団のリーダーとなつた先輩が音頭をとつて「応援歌第一」と叫ぶと、集つた卒業生の老いも若きも一斉に「富士が根おろし……」と歌い出した。是には私はおどろいた。伝統ある学校であるなあ、古い歴史をもつ学校であるなあと感心した。

一番うれしかったのは旧職員の代表として本告亮一先生に記念校を贈られたことで、本告先生のみでなく私達の喜びでもあり荣誉であると思つた。よくこの点まで気付いて下さつたと同窓会の方々に厚く御礼申し上げたい。提灯行列が発表された。今宵こそ静岡中静高卒業生であつたことを心から喜んだ諸君であつた。私も良い学校に良い時代に奉職できた幸福な教師であつた。

各期の百年祭

四二回

母校百年祭の前夜十月六日午後六時安田屋旅館に集合した者三十三名。会長森録氏の開会の挨拶につづいて針谷幹事の募金報告のあと遠く佐世保から参加した根井君の乾杯で懇親会に入つた。美坂三名も加わり賑やかな話題は半世紀を超えたあの頃の想い出が多い。

上級学校への進学も順調であり又運動各部のほとんどが県内又は近県を制覇しての頂点に野球部の全国優勝があり校歌の文字通り「文武の道を励み」だ連中である。

関東支部長・宮沢君の海外出張や仙台の国分君、東京の岩波、川勝両君や地元原川君等の不参加は残念だが防府市から原田君、鎌倉から野球の菊地君(旧姓本多)焼津のビキニ医師大井君の参加も嬉しく懐旧談も豊富であつた。宴は九時すぎまでつづき校歌と第一応援歌六番迄の大合唱で閉会として一泊組は紺屋町の菊正など二次会に前夜祭を楽しんだ。尚関東支部からの出席は柳川副会長以下、

岩崎、村松、宮崎(達)、萩原、中島、宮崎(忠)、堀、坂野、菊地と井出の十一名だった。(井出多米夫記)

四三回

吾々のクラスは昭和三年三月の卒業である。母校創立百周年記念の年は、丁度卒業五拾周年にあたる。これを記念して駿府会館で創立百周年祭が舉行される吉日を期してクラス会を開催して、五十周年記念を祝うことになった。

母校の式典・慰霊祭・新応援歌発表会・講演会・記念祝賀パーティーに列席し、その間に母校を訪問して懐旧の念にひたりながら資料展・印高展を参観した。

駿府会館における祝賀パーティー終了後、駿府公園から追手町、札の辻を経て常盤公園にいたる提灯行列に参加して祝典の最後をかざり、若き日の感激を新らたにした後、会場の三笑亭に集合した。集る者総計三十一名、小杉幹事の開会の挨拶に始まり、四三会の近況報告、会員の動行・欠席者の

情況報告があり、卒業五十周年を祝つて乾盃を重ねた後、記念撮影をとり祝宴に入つた。

母校式典に続いての宴会であつて、提灯行列の興奮も続いて会員すこぶる元気で飲む程に在学当時の昔噺しや苦難な年代であつた人生航路の五十年を乗越えてきたクラスの面々と語りあいとなった。百周年、五十周年を記念する色紙に寄せ書きをして会と母校に保存することにした。

三笑亭特選の料理とスキヤキに大いに飲み、大いに語らい祝盃をあげ、名残りを惜みながら次期クラス会での再会を約して第七十八回の四三会を終えた。

出席者は次の通りである。

磯谷幸一郎 大石貞治
大林康孝 帯金鎮一
加藤金治 神谷俊郎
川瀬利光 小杉 一
近藤伊佐男 近藤久一郎
高須 彰 滝口龜太郎
永井 景 堀田利郎
松永清平 見原三郎
森下強三 矢部 孝
鷺巢恭一 (以上静岡)
今井志郎 小河直人
国友正一 倉沢栄吉
清水正照 芹沢正憲
田崎茂夫 西沢純三

三好由三郎 (以上関東)
塚本猛次 平山 桂 (以上関西)
熊切達治 (以上広島)
(西沢純三記)

四四回

百周年記念式典、祝賀パーティを大盛會裡に終了、後余勢をかって街頭行進、引き続き喜楽で同期会(芙蓉会と呼称)を開いた。参会者二六名。我々四四期は四九周年にあたり、卒業後初めて会う者もあり、約三分の一は誰か判らぬ状況で、自己紹介で初めて思い出す者もあった。また、中には幼稚園・小学校からの同窓生も数名あり、飲む程に中学時代に帰って懐旧談に花を咲かした。

宴半ばに鈴木与平会長も数次の会合をけちも乍らかけつけ、また司馬亨君の「いくら撰生したとしても寿命はきまっているのだから、くよくよしないで大いに飲むではないか」の発言で大いに盛り上った。

最後に岡崎道夫君の自慢のタクトで校歌合唱、明年の五十周年を期して大盛會裡に終了した。

翌日は有志で、矢沢米四郎君が支配人をしている菊川C・Cで好天に恵まれ大いにゴルフを楽しん

だ。出席者、勝又正、深田平二、松井静夫、白井茂、野中俊宏(進)猪子光俊、岡崎道夫、堀豪三(関)司馬亨、吉野久四郎、真杉高之(太郎)、判治澄作(野崎)、木村庄八、山本錦次郎、堀場宗英、石上孝行、松永朗、近藤正雄、谷川修、片平九郎左衛門(信郎)、鈴木藤介、山田伊平、望月静雄、矢沢米四郎、鈴木与平、杉森欣司



(谷津)()内は旧姓
ゴルフ会 鈴木与平、木村庄八、岡崎道夫、司馬亨、矢沢米四郎、杉田茂(高木)、堀豪三
(写真説明)前列左より堀、岡崎、橋子、(女中)、野中、白井、(女中)、松井、深田、勝又、中列堀場、山本、木村、判治、杉森、真杉、吉野、司馬、後列矢沢、望月、山田、鈴木(藤)、片平、谷川、近藤、松永、石上、

四五回

われわれ45期では、百年祭の記念式典の行われた十月七日、紺屋町の浮月楼で午後六時から同期会をもった。当日、駿府会館での視察に参加した級友全員が提灯行列の行進の勢いで会場に到着するなど、集う者43名で盛會であった。

幹事の村松圭三君から百年誌編集委員として、その編さんの苦心談や資料展委員長として、資料展についての説明と案内があった。また、このたびの百年祭は他に誇り得る大規模かつ多彩なもので、

初め計画になかった提灯行列まで行事に加えられるほど同窓の意気が盛り上り、他校から視察に来た人たちが「われわれにはとても真似ができないことだ」と舌を巻いていた等報告された。

さらに募金副委員長であった遠藤久弥君からは、「記念事業のため予算は最終的には一億五百万円となった。そのうち45期の応募額は割当額の百万円に対し百五十七万円の好成績で、各期の中では上位から七位に当る額であった」と報告があり、級友の協力に対し感謝のことが述べられた。

乾杯のあと、久し振りに顔を見せた者や遠路馳せ参じた級友たちを中心に、それぞれ近況報告をした。なかでも桜井誠君が百年祭を期して呉服町の谷島屋ギャラリーで個展を開いたことに対しみんなから温い激励を受けるなど、語るも聞くも五十年前の中学時代にいかって若やいだ気分ひたり、懐しくも楽しいといであった。最後に鈴木要二、田口正治、望月 周君などの計の例もあり、互に健康をいましめ、次の機会には全員が誘い合って再会しようとして盛會裡に散会した。

(鈴木弥門記)

四七回

去る10月6日、母校百周年記念日の前後、53年度総会を開催。場所は久能山々下の久能荘。恩師本告、広田の両師を交えて四十名。ことは哀しいことに、高橋ヘイ

ケを初め三名の友を喪う。ヘイケに代つて亀山(馨)が新世話人の勞をとる。

恒例の學術講演は杉山栄一先生の「易学の根本原理」。永年の蘊蓄をかたむけての巧みな語りが視聽を集める。陰陽、木火土金水の五行に始まり、方位におよび、北を中心に話しは展開する。曰「古代中国人は北極星が動かないことから北を神の位置と神聖視した。神の位置はその儘天子、国王、社長、親父の座となる。宇宙の氣は南から北に流れるから、社長は北を背にして、南に部下を配せよ。

商談も交渉事も相手を南に坐らせれば有利にはこぼ。「君子は南面す」と言い、敗北、北上、北方や北面の武士等々、北上位の用語枚挙にいとまなし。東洋思想の理念をわきまえ、大自然は神なり、これを手本にして、自然に従ひ世に処せば、人生もまた楽しいであろうと。なめらかな話術に時間不足。語り足りぬ、聞き足りぬのまま盛大な拍手。

引きつづく宴席。89才の本告先生のご挨拶。長寿の楽しみ。「昔し若手の頃は、年寄りをみると、あんなに年とって、よほど生き延びていて何の楽しみがあるのか、と思つていたが、90才に達する今に

なつてみると日々好日、楽しいものだと思ふ。諸君も私の年齢になるには20年以上ある。精々氣をつけて、永生きして下さいよ」若々しいよく透る声に嘆息しきり。飲むほどに酔う程に、各所に陣も出来、名前呼びすての童心が行き交ふこと、いつもに変わらず。

翌7日、駿府会館の記念式典に打揃つて出席。歴史の重さと尊とさを改めて胸にきざんだ。

五三回

(今関智吉記)

創立百周年の祝が期待通り盛大有意義に行われて御同慶の至りです。五三回生としては事務局長の鈴木敏夫君を始めとする狩野、長谷川、新聞、中村、岩堀等の本部役員諸君、野球部活動の蔭の力であった後援会の長阪、清水等の諸君、又広域支部役員としての諸君等々事業の推進力となつて苦心して来た訳で、その喜びは一人のものがあり、相集つて大いに祝杯を挙げた次第で、唯今疲れ休みと言ふ所です。

式典会場で鈴木、長谷川、岩堀等の委員諸君に迎えられて各地から集る者約二十名、パーティ、提灯行列後丸山町喜久屋に集る者四十名。東京から奥野、木宮、杉山、

森下、山菅、月見里等、大阪から志田、水野、岐阜から市川(旧牧野)等、遠来の顔も見えて賑やかなクラス会となつた。来賓として鈴木同窓会長、吉川校長が出席、五三回生の活動に対して丁寧な挨拶があつた。

また旧師・直井先生、小沢先生も参加され、久し振りの慈顔仕容の皆をよるこぼせて下さつた。とくに小沢先生(二年生の頃国文法を教えて頂いた)四段活用だのカサナラ変だの憶えているかな?)

は三年生の時お別れして以来で、司馬君のお世話で遠路はるばるの御出席とあつて往時を追懐泌々としたお話をされ一同感銘した。

直井先生の音頭で乾杯、オラとオマツチの会となり予定時間は忽ち過ぎて校歌を合唱、お開きにしたが、此数年来百年祭百年祭と忙しく苦勞して来た諸君は二次会位ではとてもおさまらず、三々五々仲間を組んで静岡中廻り歩き、此処彼処で提灯を振廻している同窓生諸氏と鉢合せしながら百年の祝を楽しんだ事でした。

(月見里得知郎記)

五四回

五四期の会は、予定通りクイポール会館で開かれた。時刻は多少

おくれたが、高山・鈴木両幹事の周到な準備に感謝しながら、杉山(富)氏司会により盛大で意義ある一時をすごし、九時近くまで時の経過を忘れて歓談した。

関東支部からは、安東、下山、鈴木(猛)、永原、柴田の五氏、名古屋から大賀氏。ほか、県内各地からも多数の参加者があり、合計四十名の大合唱がフィナーレとなった。進行状況を要約すると次のとおりである。

高山氏より本会の経過説明。生田氏より会計報告あり、同期会維持費納入に協力されたいとの事。基金の合計が一、一二九、三六〇円となつたことについて感謝の意があつた。

次期幹事として、友広、杉山両氏を満場一致で選出、本部の役員は当分の間継続する。中村氏の談として百周年行事の経過について一言。昭和五十四年は、卒業四十周年となるので盛大な会にするよう提案あり、友広氏よりそのため特別幹事を依頼する旨補足、全員了承。高橋氏より五四期の募金状況に感謝の意、永原氏より国会の模様など若干。望月氏より県医師会役員に就任した旨報告。なお欠席者からの近況報告四十通ほどを回覧。

(柴田久夫記)

五六回

母校創立百年祭式典に出席する積りが当日所用の為出発が遅れ、東京駅を離れたのが二時半。静岡駅に丁度四時に到着しタクシーで祝賀パーティが行われていると言われる駿府会館にかけつけた。

静岡市街も近頃は車の渋滞で、目と鼻の先の元三四連隊の城内に着いたのが四時半。大ホールの中は正に一世紀にも及び同窓生を輩出した名門校の祝賀パーティにふさわしく、暗い中に数千人の人波で騒然としており、正面舞台には一段と明るく百周年を表わしたディスプレイが輝き、鉢巻をした老若男女が齡を忘れて若き日の紅顔の青年にかえり歓談に熱中している様を見て、世紀の祭典に無理をして出席してよかったと思つた。

人波を分けて五六期の仲間を捜し漸く数名と合流。一隅に陣取り昔懐しき顔が一つ一つと増えてくる。会場には地元衆議員の原田界左右君を始め、いつも世話役として御活躍の川口栄吉君、滝浪君、有海君・田中君・杉本君などの顔が見え、関東地区よりはる大野(日佐太)君・奥野(進)君・萩原仁君などが加わり早速記念写真をとったトタン暗くなり始め、(そ

の時撮ったのが左掲の写真。シャッターを押したのは内野静夫君（アトラクションの選抜高校野球出場記録映画が始まった。熱戦の再現に場内は沸きかえった。其の後



応援歌・校歌の斉唱の後、パーティーを終了、提灯行列に移り、校歌を高唱し乍ら夕暮迫る城内公園を発し、七間町迄行進、静岡中心街を静中一色に塗りつぶした感があった。

ついで竜宮館（杉山君）で恒例の五六期同窓会を開く。地元の参加者も合流、又関東地区から橋本保二君竹佐太一君も加わり四〇余名の盛会となり、卒業以来の初顔振れにも逢い、二時間余りの時間が瞬く間に過ぎ、お互いに名残りを惜しんでお開きとなった。五六期としては関東地区よりの出席者が以外に少なかったことは一寸寂しかった。

（写真説明）右より松田・原田・服部君長女（86回）・有海・服部田中・杉本・大野・鈴木・曲田・萩原・杉浦・浅井・青木・漆畑・奥野・長谷川。（敬称略）（松田一郎記）

五九回

記念式典出席のあと、求友亭で会を開いた。恩師を招いたとか、旧交を温めたとか、盛会裡に終ったなどというのではどうも同じ。世話役連ゆきつけのクラブのホステスが動員され、酌をして廻ったなどはユニークか？ホステスの姿に夜の時間の貴重さを催促されてか、型にはまった会には気もそぞろ、終りをまてず、彼女らの店に一足先に失礼する群も。

59期はこのたび大役をおおせつ

かった。野球部後援会をひきつぐことになったのだ。会長・河瀬卓二。副会長・大橋啓一、高野洋理事・鈴木勇雄、志田昭八郎。支部との連繫で、関東では奥沢徹氏が係りとなったが、役員だけの問題ではなく、「甲子園で優勝させる」ということは、59期生一人ひとりの肩にのしかかった課題」として、全員がうけとめるよう本部では望んでいる。（青木静男記）

六八回

爽秋の十月七日、静高創立百周年記念式典に集った68期生は、在京同期生二十数名を含めて約百三十名が新調の68期の旗の下に顔を並べた。

卒業以来始めて顔を合せる者もいたが、そこは六年間静中静高に学んだ仲間。互いに昔のアドナを呼びあって旧交を確かめあった。式典の合間、ついに一度も学ぶことのなかった長谷校舎へ行き、一角に建てられた同窓会館で行われている資料展をみながら、あらためて、戦後の流浪時代に籍をおいた我々の気持が一入たかぶるのを覚えた。

記念パーティー終了後、呉服町まで提灯行列。解散後、同期会会場である日吉町の「離宮別館」まで

の68期生だけの祝賀行進は一番印象的であった。

同期会には、逍遙歌の作詞作曲者であった化学の鈴木守郎先生を始め、義護教諭の大石りつ子先生図書司書であった八嶋たけ先生の三人をお招きして行われ、会場は熱気でむせかえるようであった。宴たけなわとなると、会場のあちらこちらに小グループが出来て互いの近況報告に話の花が咲いていた。

やがて68期名応援団長の増井成美君の号令の下、校歌・応援歌が合唱され、最後に逍遙歌が作詞作曲の鈴木先生の指揮で歌われ、同期会員の健康と幸せを祈って万歳を三唱、再会を約して散会した。

なお、今回行われた百周年記念行事の各部門に、我が68期生が各所で活躍しているのが目につき、大変心強く感じた。

（雨宮明生記）

七〇回

静高の甲子園出場を一つの契機として盛り上った百周年記念行事もやっと終止符を打つことが出来た。募金から始まったこの百周年も地元において実際に担当した人達にとっては長い道のりであった。

記念式典の当日、青春に戻って

校歌を唱い、酒をくみかわし、チ
「ウチン行列に参加した人達の感
概は、恐らく、甲子園の静高の勝
利の感激に近いもの、或いは、寮
歌祭での青春賛歌の情熱に近いも
のを味ったことと思う。百年に一
度しか巡ってこないこの歴史の一
瞬を心の中に受けとめたものと思
う。その時にすべてを忘れ、盛り
上りを見せた百周年であった。

年寄りのセンチメンタリズムの
現れではないかなどという批判も
確かにあった。寄附を出したから
には一言言わしてもらおう式の批判
も多かった。ある実行委員長が、
「いろいろな批判をいっいち受け
止めていたならば、私しやとつく
に自殺してましたよ！」といっ
た言葉がすべてを物語っている。

同期の角替弘志君のように、記
念誌を担当して一年半、特にこの
半年間は、手弁当でほとんど掛り
切りと言う。このような下積み
の苦勞には暖く拍手をおくるべき
ものである。

私も記念碑を担当させて頂き、
記念誌や募金委、または芹沢銈介
小品展開催の苦勞の何十分の一で
はあったが、とにかく未来を志向
したもの、さびしい校内にゆとり
ある空間の核を創ろうということ
で出発した。その主旨は充分に生

かされたものとは思うが、何せ、
首と手足のないブロンズ像をつ
つた。その非難が集中してしまっ
た。何故首がないのかという質問
に「私達は既成概念で像を見てい
るからおかしう思うのですよ、私
の家でだって、首のない頭だけの
像もありますし、トルソもある。

ロダンの手首だけの彫刻もありま
すよ。さすが足だけのものはあり
ませんが、その説明はどうしたら
いいのですか？あれは学生時代の
象徴として学生服をただ型にとつ
てブロンズとして設置しているの
です。ですから横に帽子も置いて
あるじゃありませんか。偉い人の
銅像と違うんですよ」と説明する
ものの途中からすっかり疲れてし
まった。投書は来る、オドシの電
話がかかるで、かつこうの話題を
提供してしまつた。幸い、地元の
各紙が「未来への躍動」とか「現
代的にしてユニークな作品」とい
う評を書いてくれたため、その後
は批判も少なくなってきた。見な
れて来たせいもあって「あれが解
らないのは、自分に見る才能がな
いのかなあ」という控え目な人も
現われる。「さすが静高、かな
かいもんだよ」と励ましてくれ
る人も多くなつて来た。

百周年を区切りとして、静高は

次の百五十周年、二百周年に向
て、スタートしたばかりである。
次の記念事業まで生きていられる
ことを祈願して一日一日を充実し
たものとして生きたいものだ。

(高木滋生記)

七一回

静中静高創立百周年、記念行事
に、我々七一期(関東支部)も、
大学式典参加し、夕方解散後、中
島屋ホテル広間において、在静の
磯谷育男君が幹事役となつて、小
泉、天石、山口、横田、土屋、松
永里見(旧小杉)らの協力で盛大
な同期会を開催した。

卒業後(二十五年)初めて再会
する懐しい顔々に、不惑の年を
忘れて、一時に十代の青春が蘇っ
た。恩師森先生・杉山先生もご出
席下さり、幹事が開会を告げ逐次
盛り上がった気分は素晴らしい感激
となり、天石応援団長の発声によ
り校歌・応援歌・追送歌と歌い進
み、運営の旨さに酔い痴れた。

更に演出は続き、現静高校長・
吉川先生百周年記念行事の主人役
という多忙な中、貴重な時間を割
いてご出席して下さい、いやが上
にも氣勢が上がり、散会後も勢い
で二次会、三次会と明方まで美酒
に酔い痴れ、翌日は二日酔いで天
国と地獄を経験した。当夜の歓楽

街は静中静高の貸切ではないかと
疑いたくなるような状態で、先輩
諸兄も十八才位に感じられた。

七一期の女性も、顔、目の輝き
は往年のマドンナを驚かせ、あ
らためて、わかさの素晴らしさを再
認識し、かつて故人がいみじくも
言った「少年老い易く、学なりが
たし」また「光陰、矢の如し」を
つくづく感じさせられた。

このすばらしい、人間的な感激
をもたらしてくれた静高の、今後
増々の繁栄と我々卒業生の増々の
健康を祈って。(次回記念行事に
も、ぜひ参加するという気概をも
って、元気に生き貫く)。七一
期関東支部員で当日参加出来なかつ
た方々に、次回はぜひ参加してく
れるようお願いしたい。

(金子雅彦記)

兄弟五人の百年祭

田 中 勇 (57回)

快晴。富士山がよく見える。今
日は静中・静高創立百周年記念祭
である。式典のあと兄弟五人が紹
介されるから是非出席しろ、と長
兄にいわれて、東京からかけつけ
た。昨夜は岩淵の家に泊つて、朝
八時半富士川駅発の列車で、長兄
八時半富士川駅発の列車で、長兄
又吉(41期)三兄良三(52期)と
静岡へ向う。往時の汽車通学時代
を思った。

途中、清水で次兄半次郎(45期)
乗車。静岡駅で大阪から新幹線
でくる四兄貞司(52期)を迎えてホ
テル中島屋へ行く。そこからタク
シーで会場駿府会館へ。ここは初
めてだが、東京の武道館を少し小
ぶりにしたような建物である。受
付で登録して、兄弟五人そろって
二階の一隅に席を占める。男
女共学だから当然のことだが、女
生徒の姿を見て一瞬オヤッと思っ
た。すぐ近くに恩師本告亮一先生
がおられたので挨拶にゆく。この
春、われら五十七期生一同で先生
の米寿をお祝した。その折、わ
たしは先生に『粘葉本・和漢朗詠
集』の複製本を贈ったのだが、そ

れが嬉しかったと、何度もお礼をいわれて恐縮した。

式典は手順よく行われ、十二時半ごろ終った。長兄の親友・柳川太郎先輩(42期)をまじえ、両替町で中食をとる。それからタクシーで長谷町の母校へ。昔の風情を残すものはブルだだけだ。資料展を見てグラウンドへ出ると、空が晴れて亀爪山がよく見えた。加藤正路君ら同期生五、六人と会う。長谷町から東草深へ出、なつかしい濠端をぶらぶら歩いて再び駿府会館へ行く。

三時からの懇親会——同じ会場が立食パーティー場に早変わり。兄弟五人、楽屋へ案内され、そこでまた本告先生とお会いする。先生は永年勤続の表彰を受けるのだった。山本知事が見えて、先生に挨拶された。いよいよ、わたしたちの出番が来た。

「兄弟五人がそろって静岡中学を卒業された田中……」というふうなアナウンス。騒音でよくききとれない。アガったのか。ライトがまぶしくて前方がよく見えない。

「56期の田中勇さん」という紹介に、「57期だ」と文句をいったのだが、ウィップという喚声と拍手でわたしの言葉はかき消されてしまった。

田舎の米屋だった親父が、それほど教育熱心だとも思われなかったあの親父が、よく兄弟五人を静中へ通わせたものだと思ふ。このことよりも、末弟のわたしをふくめ、五人のうち四人が兵隊に行つて一人も戦死しなかった、これの方がニュースだ。運が強いということか。しかも五人が戦後三十三年を生きて、元気でこうして壇上に整列している。

半次郎、良三、貞司の三人の兄たちは、それぞれクラス会があるといつて、会場の入口で別れた。わたし(54歳)は長兄(70歳)と並んで提灯行列に参加した。県庁の横から市中へ出て、呉服町通りを駅へ向う。

提灯をかかげた、いい年齢をしたオッサンたちが、ときどき「岳南健児」を唱いながら、ぞろぞろと歩く。およそしまらないデモである。だが、百周年のお祭だ。こんなトボけた行事が、たまにはあってもいいな、と思つた。兄貴と二人、行列を抜け出し、竹茗堂の店先に腰かけて、うまい玉露を飲ませてもらった。

(朝日新聞社勤務)

アラビアの地に

十五年を過して〈2〉

鼠 入 武 夫 (52回)

もうひとつ、いまだから言えることですが、慎重に電波測量を使つて一号井の位置を定め、ここにブイを投入しておいたのですが、どうも潮流によって二百〜三百メートルもとの位置から流されていったようで、その上ブイのところに掘削装置を設置しようとした時にこのブイを引っかけ曳航したりして、実際に一号井を掘った地点は最初に予定していた位置より可成りずれていたことが後で分かりました。たまたま掘り当てた油田が大きな油田であったため、この程度の位置のずれは問題にはならなかったのですが、もしこれが日本であったとすると、油田規模が小さいため、あるいは油を見つけないことが出来なかった可能性もあり、重大な結果を引き起こすことになるような問題でした。

準備をようやく終えて一号井を掘り始めたのは、昭和三十四年七月末でしたが、八月五日五百メートル程掘り進んだ所でガス層に達し、このガス層が噴き上げて来て火災を引き起こしました。この火災の消火に当っては油井・油田の火事消火専門家として世界にその名が知られているデキサス州ヒューストンのアディア氏を呼び、同氏が直接この消火作業にあたり火を消し止めることが出来ました。この時の謝礼金は確か十萬ドルであったと記憶しています。実はその後十五号井で同じガス層からガスが噴出し、これまた火災となり掘削機械を全焼しましたが、この時も一号井の時と同じようにアディア氏を呼びました。同氏は直ちに現場に来てくれたものの、火災の状況を見て即座に「この火事は自分の手におえない」とい

た割り切った態度には感銘を受けた次第です。

一号井はこの火災により掘削装置一式が完全に焼け、掘削作業は中断のやむなきに至りました。この事故は一日でも節約して一号井を完成させなければならぬ立場にあったアラビア石油にとっては大きな痛手にはなりませんが、このように浅い層でも多量のガスが見つかった以上、下に掘り進めば必ずや油を見つかることが出来るという自信が生まれたのも事実です。この復旧には四ヶ月近くの日時を要しましたが、十一月末、作業を再開した後は順調に掘進が進み翌年一月末に一号井が完成し、日産千キロットルという生産能力のあることが確認され、試掘第一号井で大油田を発見するという成功を見た訳です。

御存知の方もおられると思いますが、ひとつの油田を発見するのには日本では少なくとも井戸を十本位掘らなければなりません。石油の宝庫と言われる中近東でも、私達が仕事にとりかかった時には五〜六本の無駄井戸を掘らなければ油田は見つからないという状況でした。この点から見ると、アラビア石油が一号井で油を発見したということは、世界的にも非常に

稀なケースであり、幸運に恵まれたの一語につきると思っております。

五、出来るだけ早く 油を日本に持ち込 もうとしたこと

一号井で出油に成功したことに勢いづけられ、今度は出来るだけ早くこの油を日本に持ち込むことを考えました。通常の場合は、油田を見つければ、まずその油田の規模を確認するための、探掘井という井戸を掘り、その埋蔵量を抑え、一日どの位の生産量で、何年かかって油を取りつくすのが適当かを計算し、この一日の生産能力に見合った生産施設を設計し、建設するもので、油を見つけてから実際に油を生産してタンカーに積み込むまでは、少なくとも三年、場合によれば五年程度の時間がかかるものです。ところが、アラビア石油の場合は、海外での石油開発で初めての成功であり、この成果である石油を一日でも早く日本に持ち込むことによって、その意義を日本人達に知ってもらい必要があると考え、油田の規模を確認する探掘井を掘るかわりに出来るだけ早く石油を取り出し、

タンカーに積み込むための特別な方法を進めることにしました。この目的のため戦時標準型タンカー五隻を買い付け、これを油田の中に繋留、井戸から出て来た油をまづこのタンカーに集め、各タンカーからのパイプラインを四点繋留ブイ方式の船積施設に接続して、油を受け取りに来る外洋タンカーに積み込むこととしました。この、いわば臨時の油の積出し施設が完成し、第一船の積出しを行なったのは、昭和三十六年三月のことでした。油田を発見してから一年二ヶ月という短期間で日本への石油の積出しを開始した訳です。おそらくこの期間の短かさの点では、世界にあまり例を見ないものであったと思っています。この方式は、昭和三十八年十月、本格的な生産施設が動き出すまで、油の積み出しのために続けられました。

六、本格的生産体制 の確立

生産を基本条件として、恒久生産施設の設計とこの建設工事にかかりました。残念ながら、その当時は、日本は海洋建設工事、とりわけ石油施設については全く経験がなかったため、この設計から建設工事まで全てを、アメリカのコントラクターに依存せざるを得ませんでした。この工事に要した費用は七千四百万ドルに達し、当時としては日本では大きなプロジェクトの一つでありました。この施設のうち最も特色のあった点は、陸地から四十二キロメートルも離れている海の中の油井・集油所・送油所と陸上の積出しポンプ等の装置をすべて陸上にある中央制御室のボタンひとつで操作できるシステムを採用したこととです。この方式は当時世界のいずれの油田においても実用化されていなかったもので、全く新しい試みでありました。この設計はアメリカのジェネラル・エレクトリック社が行なったのですが今考えてみると、どうもこれは同社が油田操業にエレクトロニクス技術を応用しようとする野心的な意図のもとに、試験台にアラビア石油の油田を使ったのではなかったかと思われます。全般的にはこの装置はうまく稼働しましたが、アラビア湾の気温が

非常に高いため、半導体が高温時には正常に働かず、組み込まれていたコンピュータから得られる数値の精度には疑問が多く、この点は成功したとは言えなかったと思っております。この装置は、既に述べたように、年間一千万トンの能力で設計されていたのですが、その後生産量を多くする必要が出てきて、多少の施設の増強と改良は加えられましたが、実際には、二千万トンまで処理し得ることが実証されました。このことは設計の中に十分な余力を織り込んであったことを意味するもので、いかにもアメリカ方式らしく、もしこれがドイツあるいは日本で設計されたとなればとうていこのような余力を出せなかったと思っております。

七、新しい別の油田 発見の試み

アラビア石油がサラジ・アラビア、クウェイト両国から得た石油利権海域は、当初、約六千平方キロメートルで、一号井でカフジ油田を発見したというものの、まだ新しい油田を発見し得る可能性は十分あったので、その後利権海域で何本かの試掘を行ないました。この結果、カフジ油田の北方約三

十キロメートルのところと、昭和三十八年にフート油田を発見し、その後しばらくたって、昭和四十三年頃からこの油田の開発に着手し、量はあまり多くはないもののこの油田から現在でも油を生産しております。また、昭和四十二年アラビア湾の中心線に近いところでルル油田を発見しましたが、生産能力が十分でなかったため、この油田ではその後開発は行なわれておりません。また、昭和四十三年に、フート油田の更に北東二十キロメートル位のところで、ドラ油田(ガス田)というのを発見しました。この油田(ガス田)では浅い所で油層、深い所でガス層が確認されましたので、それ等の埋蔵量を把握するために、現在まで探掘井数坑を掘削しております。この油層とガス層はいずれも経済ベースに乗り得るものではありませんが、この油層中の油は硫黄分が比較的多いため、まだ開発は行なわれておらず、また、ガス層については、このガスをどう利用するかについて検討中であり、これまた開発は行なわれておりません。しかし、いずれ近いうちに、開発に入ることを思われます。どうも話が石油開発のことに片寄り過ぎたようなので、この辺で

私の体験を通じてのアラビアの一面を御紹介することに致します。

八、最後まで謝らない

一号井で石油が見つかったので仕事上の基地を作ることとなり、まず、その候補地を探しにかかりました。対象の油田が海洋油田であるため、基地には港湾作りに適した場所をと思って探してみたところ、幸い中立地帯の海岸沿いのラス・アル・カフジ(通称単にカフジ)というところで、約百メートルの巾を持った入江を見つけ、ここに基地を設けることとしました。早速、政府に申請して、この入江と入江をはさむ両側の陸地約四百万坪の使用権を得、水路の浚渫、船着き場の建設、入江兩岸の整地等の建設工事を進め、昭和三十三年の秋にはトレーラーハウス等も持ち込まれ、不完全ながら住むことが出来るようになりました。私もトレーラーハウスの一室をあてがわれ、室の掃除やらベッドメイキング等にボーイが一人専属でつくことになりました。このボーイはイエメン人で、年齢は十七、十八才位だったでしょう。ある日このボーイが自分のキャンピングから出勤して来るのに会社のジープを無断で使用し、途中で事故を起こ

しこのジープを破損するというハプニングが起きました。早速このボーイを室に呼びつけ、事故についての事情聴取をしました。始めは車輛の無断使用を認めようと思っただけですが、操業当初のことでもあり、車輛管理について、はっきりした規則もないため、この点では責任の追求が出来ないことに気がつき運転免許証の有無について問いたすことにしました。「お前はジープを運転したからには当然免許証を持っていると思うが、どうか」「確かに免許証を持っている」「しからばそれを見せよ」「今ここには持っていない。キャンピングに置いてある」「ではキャンピングにもどって、取って来い」「今キャンピングとの往復をすれば、あなたはこの時間を勤務時間と見なさないだろうから、キャンピングにもどるわけにはいかない」「では往復時間を勤務の一部と見なそうすぐ取って来い」「ひょっとしたら、キャンピングにはないかもしれない。昨日、荷物を一個クウエイトに送ったが、その中に入れたような気がする」「よし、解った。ではクウエイトに行つて、荷物を捜して免許証を持って来い」「クウエイトとの往復で二日かかる。自分は日給なので、二日の無給はい

たい」「それなら、特別に二日の有給休暇をやるう」「クウエイトの荷物の中にもないかもしれない。どうもなくなつたような気がする」「なくなつたものなら再発給申請をすれば良いのではないか」「クウエイトの役所の手続には時間がかかる。再発給に一週間は必要だ」「では往復の二日と、手続きに必要な一週間を合わせ九日の有給休暇をやるう。その代り必ず免許証を持って帰って来るのだ」「こんなやりとりがあつてから、彼はしばらく口をつぐんでいましたが、やおろ口を開いて言いました。「あなたは私に二週間の解雇手当を支払う義務がある」私は、彼の日頃の勤務態度は比較的良く、まじめに私の言うことを聞いていましたし、またイエメンという国は、アラビア半島の南端にあつて、これといった資源を持たないため、若い者の多くは国外に出稼ぎに出て低賃金で働いているというのを聞いていたもので、もし彼がその非を卒直に認め謝れば許すつもりでいたのですが、彼とのやりとりで解雇のように最後までその非を認めなかったので結局解雇しました。彼が最後までがんばり通したのは、自分の

非を認めれば直ちに職を失うという考え方によつたもので、逆にこちらに見れば、彼がその非を認めないから解雇せざるを得なくなつたような訳で、ここに日本人と、全てのアラブ人とは申しませんが、多くのアラブ人との間に、物の考え方、生きる哲学の面で大きな相違点のあることを知りました。

アラブの人達は広大な砂漠という最も過酷な自然条件の下でその生活を営まなければならなかったため、自分達が守らなければならぬ社会単位は、大きくてもトライブと称される部属の単位であり小さい単位をとれば、これが家族となり、更に極限すれば、この単位は自分一人とならざるを得なくなるという歴史背景を持つております。従つてこの中からは、譲り合いによる秩序の維持といった觀念が生まれて来る余地はほとんどなく、いきおい権利の主張が自分を支える基盤であるとする考えが生れて来ることもうなづけるところであります。一方、日本は徳やかな風土と儒教思想の影響を受け、お互いに譲り合うことが美德とされ、またお互いにぎすぎすした議論を展開しなくとも自然に理解し合える社会的ムードを持つてゐる国で

す。私はここで、日本とアラブの国を比べどちらの生きる哲学が良くてどちらが悪いということを言うつもりはありません。言いたいのは、風土が宗教を生み出し、その風土の中で生活する人達の道徳律、生きる哲学を作りあげているということなのです。

日本とアラブ諸国との経済交流は、これからますます強くなつて行くことでしよう。最近よく、アラブを理解しなければならぬという声を耳にします。しかし、この正しい理解には、ほんの一例ではあります。これまでお話しして来たように日本人とアラブ人との間には、その風土が作りあげた生きる哲学や考え方と大きな相違があることを理解する必要があります。アラブ諸国との間でいろいろな交渉をするに当つて、こちら側が譲れば相手側はこれを評価すると日本人は考えがちですが、アラブ側は必ずしもそれを評価しないで、場合によれば、戦に勝つたという見方すらするものです。この点は、今後アラブの国との話し合いをする際、留意しなければならぬところだと思つておられます。

陸軍大尉・小林武先生

——活字での半世紀目の対面——

賛 武 市

つれづれなるままに、鵬外全集第三十四巻を手にする。なにもテレビの三時間ドラマ「獅子のごとく」の刺戟によるわけではない。

岩波版・鵬外全集第三十四巻は、軍事・医事篇である。鵬外の著述に対する関心は、専ら小説と翻訳とにある。したがって、文学者

鵬外の作品には親しむが、陸軍々医總監の森林太郎の著述とは没交渉である。したがって全集でも軍事や医学の篇を開いたことは先づ無い。それを、たまたま手にしたのは、まったく、つれづれなるままに、であるとしか言いようがない。

なにげなく頁を繰る。「脚氣減少は果して麦を米を代へたるに因する乎」というのがある。関心をひく題目ではない。「明治三十四年軍医部長巡閱所見要略」というのがある。これとて読む気を起させぬ。

と、「第二軍々医部長臨時報告」というのが目についた。これも興

味はひかぬ。ただ頁を繰ると、フ

ト「六月十四、十五日得利寺附近ノ戦闘ニ於ケル死傷將校ノ官氏名

左ノ如シ」というのがあるのに気がついた。なにげなく見てゆくと

歩兵第三十四連隊とあつて十名の戦死者の官と姓名が載っている。ここで始めてオヤツと思った。歩兵第三十四連隊。これこそ駿府城址にあった旧静岡連隊である。少年時代、濠を越えて兵営から響いてくる唳々たるラッパの音を聞いて過したのである。

死者之部に続いて傷者之部がある。まさか知っている人の名があるうとは思はないが、さすがに見すごすわけにはいかない……。

中尉 浜田信太郎

同 北島宗三郎

少尉 中山 諭吉

同 高橋 良吉

同 小林 武

ここにおよんで、ハッと息を呑んだ。少尉・小林武。そうだ、これは

まさしく小林先生、小林大尉。失礼を承知で中学生時代のニックネームで呼ばせていただけは、ブウさんだ。

はからずも、たまたま開いた本の活字の上で、半世紀ぶりに先生と再会したので。不思議な縁というより外はない、茫然たること多し。

ここに於てか、突如として月日の歯車は逆に廻って、半世紀余の昔に還る。

中学三年生の春である。制服制帽にグートルを着けて、校庭で三年B組の横隊の内にいる。手にしているのはエンピール銃である。

さすがに静中は古い学校だ。三年生はエンピール、四年生は村田銃、五年生になると三十年式歩兵銃。中学校の武器庫はまるで明治以来の小銃変遷博物館だ。背景には賤機山につづいて二等辺三角形の竜爪山、麓からは一帯の水田、その内におづかに石割牛舎があつて長閑な牛のなき声、堤には疎らに杉木立、校庭の隅には池というより水溜りの方が似つかわしい通称三角池。

やがて、校舎から小がらな小林先生が急ぎ足で出てくる。大尉の軍服、顔は淡紙色、眼はするどい

が眼尻の皺が優しい親しみをあたえる。「礼」と級長の号令、一同低く頭をさげる、先生は厳格な拳手。横隊を先頭から末まで順にジ

ーッとにらむ。やがて、「なおい、休め」。やおら先生は軍刀を抜いて壮重に「氣を付け」体操授業の始まりである。

厳しい先生だった。悪い先生だった。すこしでも怠けたり、ずるけたりすると、姿勢を正して叱咤された。そのときの定まり文句は「その了見がよくない」

烏鬼忽忽、当時の中学生はみな七十歳を越す老人となった。先生はとうに鬼籍に入られた。

× ×

たまたま目にふれた記事は、第二軍に軍医部長として出征した森林太郎が、野戦衛生官小池正直に提出した報告書である。鵬外は三十七年に出征し、五月八日に猴児台上陸し北上転戦した。したがって得利寺の戦いは「遼陽城頭秋更けて……」の軍歌で人口に膾炙した、関谷連隊長や脇中佐が戦死し三十四連隊が潰滅的損害を受けた首山堡の奪取戦に先き立つこと三ヶ月前のことである。

そのときの先生の負傷の程度については、なにら知すところがない。先生もまた一切そのときの話

はされたことがない。今となつては知る術はない。すべては歴史の幕の彼方にある。

思うに、得利寺の戦闘で一たびは失うべき生命を長らえた先生は余生を静中での教育に捧げて悔いるところが無かったのであろう。

静中に在学中に接した先生の数は少くはない。しかし、印象の厚薄はまぬがれない。小林先生は道徳的な説教は一切されなかった。ただ生意氣盛りの中学生に身を以て「誠実」を教えられた。その得たところは、小銃を持つてする教練技術の獲得などとは、比較すべくもないものがあつたと信ずる。

はからずも目にふれた記事が、七十余の老翁を十代の中学生につれ戻した。軍服姿のブウさんは、いま校庭で直立不動(そうそう、昔はそんな言葉があつた、今はない)の姿勢で立っている。そして向いあつて緊張して中学生のわたしが立っている。

この拙文を草して、フト疑問におそわれた。なにが、こんな昔のことを書かせたのであろう。静中も、戦後の学生改革で静高に変わった。今年創立百年に当り、その式典もあるそう。してみれば、校友の多くは昭和の生れ、大正生れはまだ多いとしても、明治人の

数に至っては、その占める率は極めて少からう。してみれば、小林先生ブウさんを知っている校友は多い筈がない。この文章によって往時を追想する校友は白髪を歎く老人でその数も少ない。投稿は会報の編輯者および読者にとって迷惑千万であること疑いない。

端的率直に申せば、筆を執ったのは偶然小林武という活字にふれた衝動に因るのである。投稿するに至ったのは融通のきかぬ老人の我儘からである。

編集者諸兄、および校友諸君、とくに若い校友の諸兄姉、この愚痴ともつかぬ閑文字の掲載を寛恕し給うや、否や。

編集者も、この一文でブウサンの思い出にひたった一人です。ただ、賛武市氏なる御姓名は名簿に見当りませんから、恐らくはペンネームかと思われます。卒業期と御名前を編集室にお知らせ下さるようお願いいたします。

(編集室)

後援資金収支報告

百周年に当って野球部を甲子園に、とは同窓生誰しもの願いであ

第60回全国高校野球選手権大会
出場後援寄附金収支計算書

収 入 額 38,156,561 円
支 出 額 38,156,561 円
残 額 0 円

収 入 の 部

昭和58年10月15日現在

科 目	金 額	摘 要
寄 附 金	35,811,173 円	内関東同窓会分 1,072,000円
P T A 扱	11,474,611	
同窓会野球後援会扱	20,645,505	
印 高 会 扱	1,090,000	
学 校 扱 そ の 他	2,494,057	
現 地 扱	107,000	
朝日新聞社補助金	1,343,000	旅費を含む
静 岡 市 補 助 金	500,000	
高 野 連 補 助 金	500,000	
雑 収 入	2,388	預金利子
計	38,156,561	

支 出 の 部

科 目	金 額	摘 要
選 手 派 遣 費	6,478,840 円	選手宿泊費、旅費、現地バス代
応 援 費	4,630,048	応援旅費、プラスバンド器具、応援宿泊、入場券、応援バス補助、運搬トラック代、応援用品、諸礼金
事 務 費	913,067	印刷代、アルバイト料、郵送料、事務用品、みやげ代
県 大 会 費	1,142,500	用具代、バス代
野 球 用 具 代	1,144,000	野球道具代
施 設 整 備 費	3,630,900	スコアボード、夜間照明増設、グラウンド盛土、砂、ホームバックネット
バックネット覆建設基金	15,000,000	
野 球 部 基 金	5,000,000	
雑 費	217,206	記念品代、その他
計	38,156,561	

ったことと思います。さればこそ、草薙まで、いや大阪まで応援に行つて陽に焼けて来た人達も結構多いようですが、悲観的な予想を破つて甲子園進出が

決まったとなると、後援資金の方が忙しくなりました。日程が短いので取るものも取りあえず募金の葉書を作つて、出来るだけ多くの人達にお願いした訳

ですが、一週間ばかりの間に二八一名の方々から合計百七万二千元が寄せられ、静岡に送った次第です。実に大きな底力を持っているのだと、更めて感銘すると共に

有難く感謝したことでした。この程その資金についての収支報告が左記のようにありました。皆様に厚く御礼申し上げます。に御報告いたします。



体裁整えた江の島会

三十余年の歴史を誇るおなじみの江の島会が去る九月十日(日)午前十一時半から江の島の恵比寿屋(三五期永野氏経営)で開かれた。例によって延々数時間閉会するのが酷な位の盛会を極めた。本部から高橋孝三副会長、母校から吉川晴夫校長をはじめ関東同窓会からも多数の同窓生が馳せ参じられた。今回は特に育ての親李家前会長の亡き後、静中・静岡同窓会神奈川支部としての江の島にふさわしいよう規約の制定、役員の選出、顧問の推挙等外観・内容共にしっかりと体裁を整えた大切な会でもあった。会長・副会長には生みの親である永野清(三五期)村松直(四二期)幹事には各期から二名宛監査には井出多米夫(四二期)の諸氏、顧問にはかねがね会の発展の為に絶大な好意を寄せられた先輩諸子が推挙された。

さて江の島会の特色は①当初からそうであったように、会を愛する誰でもが会員としての資格を持つこと(規約第四条)当支部は神奈川県に居住または勤務する会員を中心に、更に広く第二条の趣旨「会員相互の親睦をはかり、かつ本部の事業に協力する」に賛同する同窓会員有志で組織する。②実際に参集する会員は、二〇期代から八〇期代迄期の層が厚く、しかも心は融合一如となる③規約が示すように、又天下の江の島と自負する通り、地域においても全国各地に及んでいること④回を重ねる毎に女性会員が増えてますます活気を呈して行くこと⑤とにかく会そのものが愉快で楽しくてたまらないこと⑥それからこれは他には見られないことであるが「ご参加の申込をいただいて実に有難い、今から当日を楽しみにお待ちしている」旨の礼状が事務局から届くと言った具合に、「心のあたたかみ」がその根底に流れている事等が挙げられる。

どうか今後ますますこの会が発展するよう会員諸子の手で育て上げていただきたい。

なお数日後早速野崎操一氏(四〇期)から当日の余興の秀逸として左掲の傑作が届けられたので感謝感激を込めながらご披露申し上げます。(42回 村松直記)

村松直氏 鳴鶴江渡航と題



ゴルフ

去る五月十七日、初夏の日ざしがまぶしい芙蓉カントリークラブにおいて、第四回印高会ゴルフ大会が、三十数名参加のもと盛大に行われました。

今回は初参加紅一点の荒谷じつ子さん(68期)が大活躍。いくつもの賞品を獲得しました。

競技の結果は次のとおりです。

優勝 鈴木弥門氏(45期)
準優勝 宮代省一氏(70期)
三位 小泉 博氏(67期)

第一回会長杯取組戦は、望月成能氏(72)のものととなりました。なお、今回は奥沢徹氏(59期)

麻雀

関東同窓会第二回麻雀大会が、去る五月二十七日に第一回と同じく東京青山の麻雀荘サンに於いて開かれました。

二十一名の強豪雀士が入り乱れ熱戦四回、役満倍満が飛び交う中一・二回の合計プラス九二をマークした黒石聖一氏(67回)が最後までペースを乱さず優勝。二位は後半盛り返した松岡誠三郎氏(70回)が、そして三位は大先輩石割正氏(38回)が、並居る若者を制し手中に納められました。

五位までは校章入り楯が授与され、加えて各賞と盛沢山な賞品をそれぞれ小脇にかかえ晩春の街に姿を消した次第であります。

なお、今回の麻雀大会に当たり宮沢会長・柳川副会長には会場設営から特別賞に至るまで、大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。(81回 高山貞和記)

ハイキング

10月22日(日)青梅線御嶽駅前午前10時集合。中途車窓から見る富士は真白な雪を頂き見事に雲ひとつない青空に映え、本当に素晴らしいハイキング日和。

立川から55分、電車はのんびり単線走り両側からせまった山際の小さい駅へとすべり込み、当日の計画コースを踏査され、万端用意された月見里先輩のお迎えを受ける。昨年の急登坂に怖れをなしたか参加者が少ないが、乗物利用の多いコースには気が楽か。

入出は多く行列になるが、バスで10分滝本へ、ケーブルカーで6分リフトで3分と乗継ぎ、ざっと六五〇米の高さを稼ぐ。ケーブルカーでの昇りは刻一刻と樹木の葉を色づかせ、りんどうの花を咲かせて秋を深めていった。標高八六〇米迄来てしまえばもう勝負はこちらのもの。ここはすっかり秋そのものの真紅の紅葉が杉木立をバックに痛いほど目にしみる。都が設けたビジネスセンターなる、いやに立派な休憩所を横目に10分余り歩けば御嶽山山頂はもう間近か。奈良時代開山の由緒ある御嶽神社が鎮座する。数多い信者を集め

る霊山流石に奉納碑も多く門前の宿坊や土産物店も歴史を感じさせる。朱塗の拝殿に見る額は見事な彩色で、山犬を従えた祭神櫛真知命のみづらに結った髪形は、幼時見せられた神々の登場する絵本を

五万分の一の地図にも載る貫録で見事な古木、いちどはご覧あれ。九二〇米の神社から青梅五日市越しに観る東京は淡いパープルのヴェールを被り、ひと際山の空気と柔らかなコースでもあって、道々の話は手放しのおのろけから遂には人妻の身も忘れてか今は花も蕾の堅いのとか、いやはや何とも賑やかな事。秩父古生層だか鳥の巣層だかの巨岩露呈するオブジェの辺りから荒くなる息も聞え出し、話の調子も落ちたが、泣き出し切らぬ20分位で日の出山頂に到着。会報四号にあった昨年の目的地と同じ標高九〇二米のはほ独立した峯だ。



膝で笑って踵で泣いて——御嶽神社の階段を登る

思い出させる。拝殿下の宝物殿は上古の甲冑太刀ほかを納めて堂々と、更に堂々と聳え立つのは宝物殿前の神代樺、逆光線に映える紅葉は嘘え様のない朱に透き通って

つけた水飴やら、たらの木の芽の水煮やらを土産物屋に見つけたいにはしゃいだが、一同冷かしに徹し、早々に目的地へと向う。山頂下の集落には民宿の看板多

くあって、信仰に縁遠い一行の中から声あり、「こんな処に泊って何するんだろうね」とは情けないが、神社からは概ね下り道、女性軍の威勢は急上昇、昨年よりずっと楽なコースでもあって、道々の話は手放しのおのろけから遂には人妻の身も忘れてか今は花も蕾の堅いのとか、いやはや何とも賑やかな事。秩父古生層だか鳥の巣層だかの巨岩露呈するオブジェの辺りから荒くなる息も聞え出し、話の調子も落ちたが、泣き出し切らぬ20分位で日の出山頂に到着。会報四号にあった昨年の目的地と同じ標高九〇二米のはほ独立した峯だ。

上天気、雲ひとつ無い空は飽く迄青く眺めた様。三六〇度の見事な眺望は我々の歓声を欲しのままにし、他の数多いパーティの交歓の様も微笑ましい。その人声にあるお国訛につられて静岡弁も登場大いに懐しさにひたり「やくてあもない」が飛び出しお開き。

昨年は往復で泣かされた石段交りの急坂を一気に駆け降り、いや実は笑い出す膝を騙し騙し森沢鐘乳洞を経て下山。青木先輩を煩わせ設置された最終キャンブカトリック秋川荘へとなだれ込む。御用意願った鉄板焼のテーブル

を早速囲み、昨年の会場の反対側修道館二階の豪華な広間にたちまちビールと空煙と一同の若さどが溢れ、月見里先輩の東京ラプソディを皮切りにワイワイ。庵原先輩に言われて、どうこう言う内本編をものするのを断り損った程の雰囲気は熱気に満ち、夜の更けるのを忘れるほどの楽しさにお開きは九時頃となった。

お世話いただいた諸先輩にお礼申し上げると共に、より多くの参加者を得てより盛大な次回が挙行される様願ひ以上ご報告まで。(68回 佐怒賀記)

その後の同窓会活動

五月一七日 ゴルフ大会

詳細別掲の通り。

五月二七日 総会打合せ会

柳川、奥野両副会長を中心に総会実行委員会が会場スエヒロで現地打合せを行った。

五月二七日 麻雀大会

詳細別掲の通り。

六月二日 五三年度総会

詳細別掲記事の通り。

七月一二日 幹事会

トップバンムア会議室に会長以下三八名集り、総会報告、名簿会報発送依頼、ハゼ釣大会の説明等を

一〇月二二日 ハイキング会
詳細別掲の通り。

編集後記

今回は百周年特集号ということだったが、静岡での記念式典や催し物についての記事は同窓会報でも読めるので、主として関京同窓会に關係あるものにしぼった。

会 報 (第六号)

昭和53年12月15日 発行

編集人 月見里得知郎

発行所 静岡・静岡

印刷所 関東同窓会

印刷所 庵原印刷所

同窓会コンペなど、ご相談ください。

伊豆大仁カントリークラブ 伊豆大仁開発株式会社

代表取締役 石橋 正 秋
取締役支配人 安田 正 弥 (66回)

静岡県田方郡大仁町浮橋字南松坂1198-1
TEL 0558-76-2401 (代表)

川 根 銘 茶

三保乃園 山 菅 茶 店

山 菅 章 雄 (53回)
(村 松 正 七)

東京都港区南青山1-20-6
TEL 03-403-5760

宝石直輸入元

株式会社 貴 信 貿 易

代表取締役 土 屋 博 (67回)

東京都台東区上野5-18-4
ダイヤオフィス6階
TEL 03-835-3785 (代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶 原 由 三 (67回)

東京都中央区八丁堀2-1-7
神鋼ビル
TEL 03-553-8981 (代表)

建築設計・管理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役 成 岡 英 彦 (67回)

一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7-1-9 規格ビル
TEL 03-363-8604 (代表)

総合広告代理店

株式会社 ア ド プ ロ

代表取締役 朝比奈 正 三 (67回)

東京都中央区銀座1-15-6 銀座NSビル4階
TEL 03-563-1921 (代表)
米国事業部
イリノイ州シカゴ市ウェストスーパークール街2031
ジャパンビジネスサービス社内

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥 野 孝 (53回)
取締役社長 奥 野 進 (56回)
取締役副社長 吉 川 善 吉 (56回)
本 社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル
TEL 03-842-6831 (代表)
静岡事務所 静岡市安東2-8-14
TEL 0542-46-9378

建築コンサルタント・設計施行業務

建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大 雄

取締役社長 奥 野 孝 (53回)
取締役営業部長 奥 野 広 (58回)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階
TEL 03-834-5331 (代表)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

熱 函 病 院

院長 小 坂 博 (67回)

住 所 熱海市春日町12-2
TEL 0557-83-3131

アクセサリースペースと憩いの空間
各種ギフト・ゴルフの商品・記念品

サロン・ド・グリーン

土 屋 晃 康 (67回陸上)

東京都新宿区西大久保3-10 プラザ新大樹ビル
(明治通りと大久保通りの交差点)
TEL 03-204-1251・1371

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 官 澤 次 郎 (42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL (295) 2411 (大代表)

鈴 与 株 式 会 社

取締役会長 鈴 木 与 平 (44回)

清水市入船町3丁目12
TEL (0543) 53-3111 (大代表)

株式会社 講 談 社

取締役社長 野 間 省 一 (44回)

東京都文京区音羽2-12-21
TEL (945) 1111 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1
TEL (833) 2111 (大代表)

保険代理業 (特別総合代理店)

株式会社 京 華 商 会

取締役社長 岡 本 敏 興 (32回)
専務取締役 今 関 智 吉 (47回)

本店 東京都千代田区大手町2-2-1 TEL (241) 7751
分室 東京都千代田区丸ノ内3-3-1 TEL (211) 7831
大阪支店 大阪市東区淡路町1-12 昭栄ビル内
TEL 06-201-3224

株式会社 東 電 社

取締役社長 岩 波 信 平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2701 (大代表)

合同酒精株式会社

取締役副社長 堀 豪 三 (44回)

東京都中央区銀座6-2 合同ビル
TEL (571) 8641 (大代表)

本田技研工業株式会社

取締役副社長 川 島 喜八郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8
TEL (499) 0111 (大代表)

新日本証券株式会社

取締役副社長 大 石 巖 (53回)

東京都中央区日本橋1-17-10
TEL (273) 2311 (大代表)

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩 井 平一郎 (57回)

本 社 静岡市国吉田645
TEL 0542 (62) 1111 (代)
東 京 中央区京橋1-2 越前屋ビル
TEL 03 (272) 4651 (代)